医史学と私

矢数道明

日本医史学雑誌第三十四巻第三号
昭和六十三年七月三十日発行

はじめに　―富士川游先生との初対面―

顧みると、私は小学校のときから地理と歴史はまったく興味がなく、不得意の科目であった。大正十五年、将来は家兄と共に漢方医学一筋に専念する目的で東京医専に入学し、在学中富士川游先生の『日本医学史』を求め、折にふれて読み親しみ、常々先生を偉大なる医史学者として尊敬してきた。

東京医専にはその頃校内に習養会という自主的研修グループがあり、例会を開いて各方面の学者や知名人を招いて講演をきいていた。昭和三年五月私が三年生のとき、はからずも富士川先生をお迎えすることになっていた。ところがその日学内に問題が突発し、四年生の先輩幹事はその方に奔走、時間がきても先生を迎えに行くことができず、三年生の幹事であった私に迎えの役が廻ってきた。

たしか麹町の中山文化研究所だったと記憶するが、私はひとりでタクシーを拾って迎えに赴き先生を会場に案内した。会員の集りはわずか十数名しかなかったが、その日の講演は『解体新書』を作りあげるまでの杉田玄白、前野良沢など、蘭学移入当時の先駆的医家の苦心談であった。先生は広い講堂の前列一かたまりの学生など気にもかけぬ如く講演を始められ、話が進むにつれて次第に熱気を帯び、やがて感動が極まると、壇上で全身をワナワナと振わせ、両拳をにぎり、唇は歪み、言葉はまったく吐絶え、落涙滂沱として両頬に流れ、数秒間の沈黙が続くのであった。

思えば、いままで私のきいた学術講演の中で、このような感涙にむせんだ、激情のほとばしるものはかつてないことであった。私は感激の閉会の後に先生をお送りした車の中で思いきって先生に、「漢方医学の現代的意義と将来性」についておたずねした。先生は即座に「医学は日に日に進歩している、漢方医学はすでに過去のもの、歴史的なものであると思う」と答えられた。先生は、漢方は再び復興するであろうとか将来性のあるものであるとかのお考えは、ほとんどお持ちではなかったようであった。

一　『漢洋医学闘争史』の著者深川晨堂氏

『日本医学史』には親しんでいたが、私には、とくに計画的に医学の歴史を調べてみようなどという考えはまったくなかった。

昭和五年三月卒業後一貫堂に勤めるようになり、翌年一月十九日森道伯先生は亡くなられた。家兄はその三回忌に『恩師森道伯先生伝—並に一貫堂医学大綱』の出版を決意し、私と弟有道は兄の意を体して即刻その準備にとりかかった。

翌昭和七年三月のある日のこと、『大村藩の医学』の著者で天下の奇人ともいうべき深川晨堂氏が、『漢洋医学闘争史』の編纂を目的とし、その頃『漢方医学復興論』を『日本及び日本人』に発表し、中山皇漢医学研究所を設け、「中山胃腸薬」を発売して一躍有名になっていた評論家中山忠直氏を頼ってはるばる九州より上京してきた。この深川晨堂氏の人物紹介は拙著『漢方治療百話』第五集の叢談編に詳しく記録してある。

私と医史学との接触は実にこの深川晨堂氏の出現によってはじめて火をつけられたようである。経済的に無一物の深川氏に対して在京の漢方医家は挙げてそれぞれの援助をし、家兄矢数格も毎月深川氏に対して編集活動資金を援助した。

その深川氏がある日、尾州藩医宗浅井家の七代目を嗣いだ浅井国幹の綴った血涙の文字「告墓文」の写しを持参した。この数枚の難しい漢文の写しに目を通したときの感激は、年毎に熱気を加え私はすっかりそのとりこになってしまった。

国幹のご長男浅井新太郎氏が当時目白に在って、陸軍大学の漢文の教官をされていたので訪問し、その教えを受けて難解な告墓文の解説に着手した。そして「国幹浅井篤太郎先生を懐う」という原稿をまとめあげたのは数年後の昭和十四年二月のことで、『漢方と漢薬』の第六巻二号に発表した。同じ年の六月に「金元李朱学派について」を掲載したが、医史学関係のもので戦前に発表したのはこの二つだけであった。

昭和十六年より足かけ六年間私は南方ソロモン群島の戦地生活を送り、昭和二十一年九死に一生を得て帰還、郷里茨城で兄と一緒に診療に従事し、昭和二十六年十二月現住地に新築上京した。

二　日本医史学会に参加

私が日本医史学会の例会にはじめて参加するようになったのは、石原明氏に誘われて決心したのであった。石原氏は当時理事長の内山孝一氏とともに、日本医史学会と日本東洋医学会とを接近させた功労者と私達は思っている。それまでは蘭学研究が主で漢方関係は微々たるもので、戦時中の学会の役員をみると、理事は安西安周氏ただ一人で幹事に龍野一雄氏がいるだけであった。

私が日本医史学会の例会にはじめて演題を出したのは、昭和二十九年二月二十日のことで、「本間棗軒自筆麻沸湯秘伝書の供覧その他」というもので、会場は医歯薬出版社の応接室であった。例会の参加者はいつも数名で、山崎佐、内山孝一、石原明、大鳥蘭三郎、今田見信の各氏で、山崎前理事長や内山理事長、石原明氏よりいろいろと懇切なご指導を頂いた記憶が残っている。

たまたま郷里に帰ったとき、隣家の旧友の祖先が四代続いた漢方医で、友人の祖父富田玄東が本間棗軒の門人で、家宝として秘蔵していた古い資料を全部披露してくれた。その中に棗軒直筆の麻沸湯の秘伝書を発見、いろいろと調査の上例会で発表することになったが、棗軒筆麻沸湯秘伝書の紹介はこれがはじめてのようであった。

翌昭和三十年二月十五日の例会に「刀圭の語義と救急薬籠の供覧」を、やはり医歯薬出版社で発表した。多紀元堅が安政初年に、考証学者で度量衡の大家狩谷棭斎と小林東平二人に命じて数個を鋳造したという、周尺に則った古制刀圭を、患家で築地の大親分佃政二代目を嗣いだ漆器業下崎長五郎氏より往診のお礼に頂き、浅田宗伯が大正天皇ご治療のとき用いたという箱書きがついていた。日本でただ一個残っていた珍品であることを石原明氏が証明してくれた。

そして昭和三十年四月三日、京都女子学園で医史学会と日本東洋医学会が合同で開いた総会に当って、私は前述富田家の資料をさらに詳しく調査して、「水藩烈公の医学教育と常陸大宮郷校富田玄東の業績」と題する総会講演を行った。これは総会発表の第一回目で、中野操先生のご希望で『医譚』八号に掲載した。

さらに昭和三十一年四月二十二日、東大講堂における第五七回総会で、「温知社遺品の解説と供覧」を発表し、このとき石原明氏は、この遺品こそ、「日本漢方医界の三種の神器」であるという評価をしてくれた。昭和二十九年よりわずか五回の発表をしたに過ぎなかったが、昭和三十五年の理事会で私は理事に推薦された。

私が日本医史学会の例会や総会でどのような演題で講演を行ったかを列挙すれば、大体「医史学と私」の概略を知ることができる。昭和五十五年に発行された『日本医史学雑誌索引』には一九の目次が掲げられているが、実際には七回が漏れていて、全二六回の中総会が九回、例会が一七回であることが判明した。これらの発表の本文はほとんど『漢方の臨牀』誌に掲載されている。私の発表は専門誌に発表する形態を具えていないので、学会誌へは遠慮した。

次に日本医史学会の例会、総会で発表した演題と年月日、会場を一覧表として掲げてみることにする。

これをみると、昭和五十三年五月二十七日を最後にまったく日本医史学会と中断の形をとっているが、五十五年から六年間、私は大塚敬節氏とともに責任監修者となり、名著出版社より『近世漢方医学書集成』の出版に協力、室町時代より明治初期に至る、四五〇年間の各時代を代表する五六名先哲医家の残された主要文献を、全一一六巻にまとめて復刊する仕事に微力を傾けることになった。

この『近世漢方医学書集成』には、昭和五十三年一月八日より一二回にわたって、私が『読売新聞』に投稿した「漢方医学の変遷と将来」を読んだ名著出版中村社長が、その企画を決意したという経緯がある。集成の中で私は、田代三喜、曲直瀬道三、曲直瀬玄朔、多紀元簡、山本鹿洲、村瀬豆洲、多紀元堅、浅井正封、浅田宗伯、九人の解説を担当した。

次に、昭和二十九年二月より昭和五十三年五月までの二十四年間に、医史学会の総会や例会で発表したテーマと年月日および会場を略記してみることにする。

日本医史学会発表講演

自昭和二十九年二月
至昭和五十三年五月

目次	昭和年月日	会場
本間棗軒自筆麻沸湯秘伝書の供覧その他（月例会）	29・2・20	医歯薬出版社
田代三喜の坐像とその著書（東洋医学会と合同講演会）	29・6・26	中将湯ビル八階
刀圭の語義と救急薬籠供覧（月例会）	30・2・15	医歯薬出版社
水藩烈公の医学教育（東洋医学会合同第五六回総会）	30・4・3	京都女子学園講堂
温知社遺品の解説と供覧（第五七回総会	31・4・22	東大医学部第一講堂
日本における膵臓の認識（第六一回総会）	35・5・15	東大医学部講堂
尾州藩浅井家の事績（第六三回総会）	37・5・20	慶大医学部講堂
明治時代における漢薬の薬理学的研究業績とその史的考察（日東洋医会と合同例会）	37・10・20	小田原星崎記念館

目次	昭和年月日	会場
東京医大図書館所蔵の珍らしい古医書（例会）	40・1・30	東京医大図書館
『読腹証奇覧』を読んで（第六六回総会）	40・5・15	東大図書館講堂
初代道三の書簡と九代道三の方函について（総会）（矢数圭堂と共同）	41・5・15	神奈川県歯科医ホール
「脈なし病」最初の記録者山本鹿洲・田代三喜『十巻書』（例会）	41・11・26	慶応北里図書館
『明治百年漢方略史年表』作製余話（例会）	43・6・29	順天堂大学会議室
京都跡尋社長吉益四峰の業績（例会）	44・6・28	慶応北里図書館
明治初期漢洋脚気病院設立の裏面史とその治療成績について（総会）	45・6・6	千葉市文化会館
『医学天正記』の研究(一)（総会）	46・4・4	一ツ橋講堂

目次	昭和年月日	会場
吉益東洞門人録について（例会）	46・11・27	上野日本学士院
明治の漢方月刊誌『春雨雑誌』などについて（例会）	47・5・27	順天堂大二階三教室
『医学天正記』研究㈡（総会）	47・9・17	東北大病院中央講堂
㈠江戸史蹟、道三堀、道三橋などについて ㈡浅田宗伯書簡と仙桃集について（例会）	48・3・24	順天堂大二階教室
近衛家旧蔵の薬籠中の古文書について（例会）	48・6・23	慶応北里記念会館

目次	昭和年月日	会場
㈠初代曲直瀬道三没年考 ㈡初代道三の主著『啓廸集』序文の中の「利陽」について（例会）	49・9・28	順天堂大講堂
寿徳院曲直瀬玄由家系譜について・「道三橋」の訂正（例会）	50・11・22	慶応北里図書館
漢洋脚気病院の追加（例会）	51・9・25	順天堂大講堂
日本における中国古代医聖の画像刻像について（総会）	52・5・21	エーザイ川島博物館
金斗鎔博士の『漢方医学の解剖学』紹介（例会）	53・5・27	順天堂大講堂
		（以上二六回）

日本医史学会の発表とは別個に、医史学に関連する原稿は相当数あるので、細大漏さず集約してみることにした。

三　医史学関係発表記事

このたび医史学に関係したいろいろの記録を全部拾ってみたところ、大小合せて一三一という数字になっていた。日本医史学会発表論文と重複するものもあるが、拙著『漢方治療百話』第一集より第六集の中に、その大体が載録してある。この本は治療編・論説編・随筆編・叢談編の四部から構成され、全六集を通じての医史学関係記事をこの四部に分けて摘出してみると、治療編三、論説編一一、随筆編一七、叢談編八五であった。集別では、第一集一〇、第二集一三、第三集一四、第四集二一、第五集三三、第六集二五で、総計一一六であった。

以上の記録を列挙し、百話各集の頁を入れると、『治療百話』医史学関係記事の総目録となる。＊印をつけたものは、

日本医史学会で発表したものである。

○印を付けた論文を集めて『近世漢方医学史―曲直瀬道三及その学統―』として一本とした。

また、以上の発表を類別してみると、

(一) 今大路・曲直瀬家関係　二三編
(二) 浅井家関係　一一編
(三) 遠田澄庵関係　九編
(四) 張仲景関係　五編
(五) 田代三喜・多紀家・浅田家　各三編
(六) 吉益家・本間家　各二編

その他である。

『漢方治療百話』掲載の医史学関係論文総目録

目次	百話集	頁
(一)治療編		
「片山病」について	五	二〇二
いわゆる「ケンビキ」「ヘキが痛い」の俗称	六	二〇三
「上医は国を治し」の出典	六	二三七
(二)論説編		
明治以降漢方医学の変遷とその将来	三	三四二
*明治初期漢洋脚気病院設立とその治療成績について	三	三五七
○日本における東洋医学の展開	四	二九七
明治以降漢洋両医学の対立と交流の変遷について	四	三三一
○後世派医学（金元李朱医学）の特質について	四	三三八
○本邦後世派医学の開祖　田代三喜について	五	二一六
○日本医学中興の祖　曲直瀬道三について	五	二四二
漢洋脚気病院の遠田澄庵をめぐって	五	二七六
○日本における古方と後世方の由来と日韓漢方医学交流の歴史について	五	三〇〇

目次	百話集	頁
日中漢方医学交流の歴史	六	二七二
江戸医学における『医心方』の影写と校刻	六	二九五
事業の経緯（小曽戸洋氏と共同）		
㈢随筆編		
権田直助翁を偲ぶ—五十年祭に列席	一	四二三
中山忠直氏の追憶	二	四二六
富士川游先生の思い出	三	四四九
○細川勝元は晴元の誤り	四	五四〇
「東洋医学」の名の起った時代はいつか	四	五四五
遠田澄庵は温知社に加盟していた	四	五四八
道三と三喜の機縁	四	五五一
浅井国幹先生顕彰碑の建立	五	四〇九
浅井国幹先生顕彰記念祭を終えて	五	四一〇
京都妙満寺に浅井家三代の墓碑を訪ねて	五	四二〇
浅井長政の史跡を訪ねて	五	四二七
江州浅井家三代の追悼供養に招かれて	五	四二九
木村博昭翁五十年忌祭典に列席して	六	三七七
浅田宗伯翁出生地の史跡を訪ねて	六	三八九
木村博昭先生が認めた宗伯翁最期の病床日記	六	三九一
蔡鍔将軍の病歴書	六	四〇七
武見太郎先生の逝去を悼む	六	四二八
㈣叢談編		
薬の味・薬の匂い・薬の色	一	四四一
漢方製剤について㈠、㈡	一	四五五

目次	百話集	頁
薬酒考	一	四六四
いわゆる「かんのむし」について	一	四七一
瞑眩の語義について	一	四八七
○国幹浅井篤太郎先生を懐う	一	五三七
*旧温知社遺品について	一	五五一
*本間棗軒とその秘伝書	一	五六三
*「刀圭」の語源について	一	五七五
○日本医学中興の祖　曲直瀬道三	二	四五三
○今大路家墓域改修保存と追薦祭	二	四八五
○初代曲直瀬道三の墓に詣でて	二	四九三
曲直瀬玄朔の書翰をめぐって	二	四九六
*尾州藩医浅井家の伝統と事蹟	二	五〇四
尾州藩医浅井家累代の墓に詣でで	二	五一九
○多紀家累代の墓塋とその事蹟	二	五二六
烏頭・附子中毒に関する文献的考察	二	五五三
*明治時代における漢薬の薬理学的研究業績とその史的考察	二	五九二
*日本における膵臓の認識経過について	二	六一一
宮中出仕漢方医家の当直日誌	二	六二〇
*医聖張仲景画像考—多紀医学館・木村済世塾宝蔵—	二	六三六
*「脈無し病」記載の漢方医書『橘黄医談』と	三	四八七
○その著者山本鹿洲翁について—田代三喜著作集の紹介—	三	五〇〇

目次	百話集	頁
○『日本医学史』曲直瀬道三伝中の細川勝元の誤りについて	三	五〇八
○玄門の俊秀―野間玄琢翁の墓に詣でて	三	五一一
野間玄琢先生年譜の紹介―曲直瀬玄朔門下の四天王―	三	五一四
○京都跡尋社長吉益鉄太郎伝―深川晨堂氏資料の中から―	三	五二二
北総の名医石原吾道伝―深川晨堂氏資料の中から―	三	五三〇
尾州の名医―村瀬豆洲翁を偲んで―深川晨堂氏の資料の中から―	三	五四〇
『華岡青洲の妻』を観て	三	五四三
呉秀三博士の書いた猪子吉人先生伝	三	五四八
私のコレクション	三	五五四
*初代曲直瀬道三年譜と逸話補遺	四	五七八
○江戸史蹟「道三橋」「道三堀」「道三河岸」などについて	四	五九二
○初代曲直瀬道三の没年考	四	六〇一
*初代道三『啓迪集』自序中の「利陽」について	四	六〇六
曲直瀬玄朔年譜と今大路家記鈔抜萃	四	六一〇
○曲直瀬玄朔が後陽成天皇に灸治をした始末記	四	六二〇
*曲直瀬玄朔の『医学天正記』治験録をめぐって	四	六二六
東洞門人録の中の中神琴渓	四	六四一
浅田宗伯書翰に思う	四	六四八

目次	百話集	頁
温知社幹部次韻の『仙桃集』について	四	六五四
『神農本草経』の「乳難」と「産難」について	四	六六六
*『春雨雑誌』と『医心』を加え、再び明治以降の漢方関係諸雑誌一覧表を紹介する	四	六七六
鴆殺・毒害・毒見について	四	六八一
*近衛家旧蔵の古薬籠について	四	六八三
○曲直瀬道三の主著『啓迪集』の自序について	五	四八三
○曲直瀬道三の主著『啓迪集』周良策彦の題辞について	五	四九五
○寿徳院曲直瀬玄由家系譜について	五	五一〇
○曲直瀬道三の「曲直瀬」と改姓の由来と道三と改名の由来その他	五	五一五
「道三橋」、「道三堀」の追加訂正について	五	五一九
曲直瀬玄朔の『延寿配剤記』について	五	五二四
○田代三喜の三帰廻翁医書（三喜十巻書）の復て刊につい	五	五二七
*日中医祖医聖の画像・刻像・尊号書等について	五	五三〇
*恩賜神農像・祭祀変遷年代表	五	五四一
「医聖張仲景画像」考―中国で発表の仲景像―	五	五四七
国立博物館銅人形について	五	五五八
遠田澄庵補遺	五	五六二
シーボルトと本間棗軒のこと	五	五七二
片倉鶴陵の門人大森元昂の墓を訪ねて	五	五七五

目次	百話集	頁
和田啓十郎先生顕彰記念文集―記念講演要旨	五	五七八
薬学博士下山順一郎先生のこと	五	五八三
医学博士三浦謹之助先生のこと	五	五八七
『漢洋医学闘争史』の著者深川晨堂氏の追憶	五	五九二
洋金花の全身麻酔と華岡青洲の妻の失明について	五	六一九
明治以降漢方雑誌の復刻版	五	六二二
「先哲医家名鑑」追補	五	六二四
茨城県の医史	五	六三〇
遺墨にみる医家の教養	五	六三五
*水藩烈公の医学教育と常陸大宮郷校富田玄東の業績	六	四三七
医学歴史散歩　茨城県	六	四四五
本間棗軒翁書簡について	六	四五三
漢洋脚気病院の遠田澄庵について	六	四五七
遠田澄庵家系図と藤本琇丈氏の回想記	六	四六二

目次	百話集	頁
日本における「医聖張仲景画像」と「医聖漢張仲景先生之碑」について	六	四六七
四川省大足県宝頂石窟内の張仲景腹診図について	六	四七三
今大路家五代目道三玄淵法印と曲直瀬正淋養安院三代目玄理法印の書翰について	六	四九〇
多紀元堅の号、蓋庭の「蓋」の字、その他	六	四九九
『和漢医林新誌』の発行所「杏雨社」と大田正隆翁の旧趾	六	五〇三
漢方医学復興の先覚者和田啓十郎先生	六	五〇七
○道三・三喜邂逅の地「柳津」考	六	五二二
日本における漢方復権運動小史年表	六	五三三
張仲景学説シンポジウム第一回大会に参加して	六	五五五
『医心方』命名のいわれ	六	五五九
山田業廣自筆稿本『金匱要略集注』及び『金匱要略札記』の写し、日本里帰りについて	六	五六一

この他、『治療百話』に掲載しなかったものは以下である。

記事名	昭和年月	掲載誌巻・号・頁
雪剤について	32・4	漢方の臨牀 4・9・57
医跡の跡を訪ねて　水戸地区	36・	実験治療 352・8
林静斎『経歴漫誌』抄―深川晨堂氏資料より―	43・10	漢方の臨牀 15・10・3

記事名	昭和年月	掲載誌巻・号・頁
地黄をのみ、大根をたべると白毛になる説	44・6	漢方の臨牀16・6・29
森道伯先生四十年忌に当り一貫堂医学を省みて Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	46・7～10	和漢薬218・220・221
『東医宝鑑』の著者「許浚」略伝	46・10	漢方の臨牀18・10・45
曲直瀬玄朔と文禄朝鮮の役	48・5	漢方の臨牀20・5・7
吉益震助が奥田鳳作に送った依頼書について	50・1	漢方の臨牀22・1・33
浅井惟亨（号南皐）について	50・10	漢方の臨牀22・10・22
「霍腎風」について	51・5	漢方の臨牀23・5・31

（以上一〇項）

『漢方治療百話』第六集以後、『漢方の臨牀』誌に掲載した医史学関係記事は次の五項である。以上を合計すると全部で一三一項目となる。

表題	昭和年・巻・号・頁
中国の医史学者宋大仁先生の急逝を悼む	61・33・2・50
五十嵐金三郎著『浅田宗伯書簡集』序文	61・33・10・55
塩釜の遊佐一貫堂について	62・34・3・32
漢洋脚気病院に登場する「小林恒」のこと	62・34・5・42
日本漢方戦前・戦中・戦後の展望	62・34・11・48

おわりに

昭和六十二年九月十三日は、初代曲直瀬道三の生誕四八〇年に当り、今大路家二代目以降の菩提寺である渋谷祥雲寺にて、東亜医学協会が当番連絡役を勤め、日本医史学会はじめ五団体の共催で、法要と記念講演会を行った。

関西より、宗田一・杉立義一・大谷雅彦の各氏が参加、ご発表があり、曲直瀬家に関する新しい資料がつぎつぎとあら

われた。慶大図書館の道三資料の全貌が高橋正彦教授によって公表され、従来不明の部分が明らかとなり、また従来の発表も修正を要するところが多くなるものと思われる。

この十年間、筆者は日本医史学会にはまったく演題は出さなかった。今年になって思いがけなく私のところの書庫に、「奥田本」吉益東洞門人録、さらに木村済世塾旧蔵の吉益南涯三代門人録「深川本」が発見された。杉立義一氏より是非公表して欲しいとのご希望があったので、日本医史学会総会へは「奥田本」を、日本東洋医学会総会へは「深川本」を紹介することにした。はじめに述べたように、「医史学と私」は、深川晨堂氏とのかかわりが深いことを改めて回顧することとなった。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所）